



「二の鎖」

カブト嶽

越知町市街地から西方に望む屋根形をした「カブト嶽」。横倉山系のシンボリック存在で、いかにも勇壮で神秘的である。『四国のみち』はこの尾根筋を通っている。織田公園の登り口から55分ほど行った所の尾根に安徳天皇従臣・後藤内貞経ノ墓がひっそりと建っている。横倉山には、このような安徳天皇従臣の墓が、天皇の陵墓（参考地）を取り囲んで護衛するように八十数基が点在している。ここから約30分行った所から勾配が俄かに急になり、いよいよ「カブト嶽」に差し掛かる。傾斜はゆうに45°はあり、相当きついコースである。急な坂道を登り詰めた所からゴツゴツした岩場の崖を大小三つの鉄の鎖を伝って山頂を目指すことになる。かつての「横倉山修験道」の主な行場の一つである。登り口付近には、安徳天皇従臣・蔵人太夫業盛(?)の墓と言われる石積み(約75×90cmの長方形)がある。ここからは鉄の鎖を使って登ることになるが、中でも二の鎖【写真】は最も急な岩場に掛っていて約27分もあるので、とても普通の者ではそれを伝って登ることは困難なため、迂回路がついている。三の鎖を登った所が同じ修験道の行場、愛媛県石鎚山の遥拝所で、ここからの眺望は素晴らしく、眼下に蛇行する清流・仁淀

川と越知町市街地が見渡せる。そしてさらに遠くには、四国山地の山々も一望でき、横倉山系の中でも一二を争う景勝地である。ここから西は少しの間平坦であるが馬の背のように両側が切り立っていて、特に南側はほとんど樹木の無い断崖絶壁である。江戸時代の宝永年間の『宝永地震記』に、「…横倉別府山二の宮（杉原神社のこと）の山頭東の方へ崩れたることより麓まで四五十丁程崩れ落ち…」とあり、4～500,000m²にわたって地震〔宝永南海地震：宝永4（1707）年〕による大崩壊があったことがわかる。おそらくカブト嶽を含む南斜面一帯がそれに当るものと思われる。しかし、逆にこの険しい岩場が、牧野富太郎博士の発見・命名による「トサノミツバツツジ」〔横倉山タイプ植物〕の自生地にもなっている。尾根から北斜面にかけてはアケボノツツジもわずかに見られる。

カブト嶽は、地質学的には4億年前の日本最古の陸上の火山活動に伴う火砕流堆積物である溶結凝灰岩からできている。平成3（1991）年に長崎雲仙普賢岳で発生し、多くの犠牲者を出したような大規模な火砕流がここ横倉山でも起こったことがわかる。ただし、それは横倉山がまだ赤道付近にあった遠く南の遠い昔の出来事である。



牧野富太郎が“師”と仰いだ横倉山

安井 敏夫

今年2012年は、牧野富太郎博士の生誕150年に当る。博士は文久2（1862）年4月24日高知県佐川町生まれで、昭和32（1957）年1月18日に95歳（満94歳）で東京で亡くなっている。

博士は幼くして両親、祖父と死に別れ祖母に育てられるが、博士の守役（乳母）が越知町出身の女性だったため、子供の頃度々越知町には来ていたと思われる。実際博士にとって、少年時代から本来の生活は学校ではなく自然の中にあり、博士が最も自然に接し、最も親しんだ場所が横倉山であったといわれ、生涯のうち度々横倉山を訪れている。特に少年期の12歳の頃は毎日のように山に登ったようである^{*1}。

のことである。その頃のヨコグラノキの推定樹齢は30年ほどといわれており（『不思議の森から』Vol.18）、牧野博士が生まれる8年ほど前の安政元（1854）年頃に着生したことになる。新種として発表されたのは14年後の明治31（1898）年で、従って、現在の推定樹齢は約160年となる。正に牧野博士とともに時代を歩んだほぼ“同世代”ということになる。そして、この木のもつ意義は、牧野博士の発見・命名による『横倉山タイプ植物』の中で唯一、‘この木をもって命名した’という、“ヨコグラノキの原木”であり基準標本であるということである。ちなみに、同じ馬鹿試して発見・命名された「ヨコグラブドウ」は既に絶滅してしまっ

ている。

博士の横倉山における足跡に関しては、博士の日記から、昭和9（1934）年8月2日、博士73歳の時、高知博物学会主催の横倉山植物採集会が開催され、「土佐の曾」約150名の一行が高知を早朝に出発し、植物採集会のための横倉山登山を行っている。行きは横倉山東麓の文徳地区から登り始め、杉原神社、金峯山神



写真1（前列中央の背広を着た蝶ネクタイ姿の人物が牧野博士）

そこから「自然は優秀な教師である」ことを悟り、「ここ（横倉山）が私の先生だ」と言い、自然の中から多くのことを学んだようである。

横倉山で牧野博士が日本で最初に発見・命名した植物（『横倉山タイプ植物』）は実に32種（横倉山全体では35種）^{*2}にも及ぶが、一地域でこれほどの数は全国的にも珍しいようである。『横倉山タイプ植物』の中には、横倉山の名にちなんだ「ヨコグラ」の名前を冠する植物がいくつかある。その中で、馬鹿試しの横倉宮の北隣の石灰岩の岩場にある「ヨコグラノキ」〔越知町指定文化財〕は、博士が発見し採集したのが明治17（1884）年で、博士が数え22歳の時

社（横倉宮？）、バカダメシ（馬鹿試し）、住吉神社などに足を運んでいる。この時杉原神社前で撮った集合写真が残っている【写真1】。真夏のため、ほとんどの参加者が白いワイシャツ姿である中で、博士はワイシャツに背広を着て、蝶ネクタイというお決まりの正装の出で立ち（さすがにいつものベストは着ていない）でカメラに収まっているのが印象的である。博士の採集スタイルがいつも正装姿であるのは、自分の愛する植物に会いに行くためと、植物に対する畏敬の念があったからではないかと考えられる。それに、博士自身大変お洒落であったというエピソードも残っている。なお、この横倉山登山の日の夕

方であろうか、『日本名瀑百選』（または『日本の滝百選』）で『越知町十景』の一つでもある「大樽の滝」に立ち寄っている【写真2】。

博士は、この2年後の昭和11年4月19日の高知市高見山での高知博物学会会員の植物採集指導の

ため帰省し、13日に佐川町奥土居の満開の桜と旧尾川村のワカキノサクラを見に行っているが、結局横倉山を訪れることはなかった。その後強靱な博士も、87歳の時大腸カタル、91歳の時老人性気管支炎を患い生死をさまようことになるが、かろうじて一命を取り留めている。しかしながら、病の床に臥すことが続き、94歳になって急性腎臓炎のため肺炎が悪化し、そのまま昭和32（1957）年1月8日、95歳（満94歳）で永遠の眠りにつくことになる。この間、昭和31（1956）年4月1日には、「文化向上会」※³の6名の会員（会長と越知町内の2名の高校生を含む）が土佐の植物をお土産に病床の博士を見舞いに大雪の東



（現在の大樽の滝）



写真2（前列中央の蝶ネクタイ姿の人物が牧野博士）

京の自宅に赴いている。この時博士は、横倉山の思い出話もしてくれ、懐かしかったのか「ヨコグラノキの花をもう一度見たい…」と言われたそうである。その願いもむなしく博士はこの翌年1月に亡くなることになる。

博士が病床で色紙にしたための歌に「横倉山 神庭に杉の太木茂りけり 牧野結綱 九十三歳」というのがある。杉原神社の大杉のことを詠んだ歌であるが、博士が亡くなったのが95歳（数え年）なので、死ぬ直前まで懐かしい横倉山のことが頭の中に記憶として残っていたと思われる。博士は93歳の12月に肺炎にかかり病臥することになるので、この歌を詠

んだのはその前後ということになる。あるいは、博士が病の床に伏した直後に懐かしい思い出の地・横倉山のことを色紙に歌をしたためたとも考えられる。この他、横倉山を詠んだ歌に「森々と杉の本立ちの限りなく神代ながらの横倉の山」がある。これは博士が葉書に書いて佐川町に送った文の中に書かれているものであるが、博士の筆跡そのままに歌を刻んだ石碑（「越知平家会」建立）が、横倉山杉原神社近くの山小屋の南隣にあって、博士の横倉山における足跡を今に伝えている。

いずれにしろ、牧野博士と横倉山とは切っても切れない関係にあり、横倉山という植物の宝庫である偉大な山があったからこそ、牧野富太郎博士という世界的な植物学者が誕生できたといっても過言ではない。

- ※1 記録の上からは、少なくとも博士が19歳の時横倉山に登っている。
- ※2 タイプ植物の数についてはいくつか説があるので従来のもに從った。
- ※3 牧野富太郎博士が明治時代に設立した「理学会」を前身として昭和22年に設立されたもので、牧野博士を最高顧問とする有為の中・高生を会員に研究活動をする団体。

（やすい としお／
横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員）

【牧野博士が採集した植物標本】（東京都立大学牧野標本館 寄贈）



ヨコグラブドウ（絶滅種）



ヌリワビ

【植物スケッチ】（資料提供：高知県立牧野植物園）

牧野博士は、採集した植物を自ら描き、石版印刷で印刷している。博士の植物画の精密さは、ロシアのマキシモヴィッチ博士を始め、海外の研究者からも高く評価された



トサジヨウロウホトギス



コオロギラン

“土佐の投入堂” 聖神社の整備

安井 敏夫



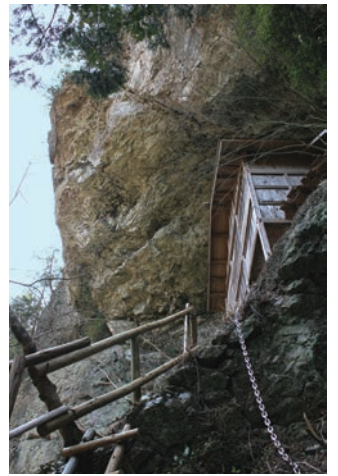
写真1

越知町南西端の小日浦地区にある、溪谷沿いの断崖の岩場の洞穴にすっぽり収まった「聖神社」(“土佐の投入堂”)『不思議の森から Vol. 24』。その参道の整備が、地元出身の町民を中心に横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」のメンバーによって進められている。最初の平成23年10月には、地元出身の町民ら16名が溪谷に沿って走る参道の道作りを行い、その後有志(内博物館職員で友の会会員1名)が石段を新たに築いたり、自前で鉄の鎖を三ヶ所に掛けたりして【写真1】、すっかり参道らしくなってきた。さらに、11月23日(水・祝日)には、友の会の行事:「聖神社への道づくり」として、小雨の降る中、神社を修復した地元出身の元大工・岡村豊延氏と友の会会員(3名)、一般(1名)の計5名で、社殿内部の掃除と雑巾掛けを行い、櫛を指す花筒、手水鉢を揃え、神社としての姿が次第に整ってきた。また、聖神社の対岸からの眺望は一層迫力があって素晴らしく、特に紅葉の季節は周囲の色とりどりの木々に包まれて美しい【写真2】ことから、そこへ至る小径の整備や案内板の設置等も行い、来訪者を迎えるための準備が進みつつある。

「聖神社」は、その立地条件が県内はもとより全国的にも珍しく、現在越知町とそ

の近隣の6町村で推進している、『四国カルスト・仁淀川ジオパーク』の魅力ある一つのサイトとしての価値も高く、期待が寄せられている。

小日浦地区は、「聖神社」だけでなく、かつての神戸製鋼によるマンガン鉱山(閉山)があり、坑道跡が点在している。「聖神社」への参道沿いにも3ヶ所ほど残っていて、その中には坑口が溪谷まで完全に突き抜けた大変変わったもの(“通り抜け坑道”) [幅: 13~14^{メートル}、高さ: 18^{メートル}、長さ:



18^{メートル}]【写真3】もある。ここでは、出口からゴンドラで神社の真下の滝(“聖滝”?)のある溪谷に降りられるようになっている【写真4】。また、神社南方の山の北斜面には、標高1,000mに満たない低地のものとしては県内では大変珍しいアケボノツツジの群生が見られるといい、

写真2 (岡村健造氏撮影)

秋の紅葉とともに見どころが多い。さらに、つい最近、佐川町・津野町との境の尾根に林道が抜け、「大タヲ展望台」からは遥か南に太平洋を臨むことができる。「聖神社保存会」では、「聖神社」を始めとするこれらの景勝地を保存し後世に残していこうと、5月3日(木・祝)に神事を執り行い“お堂開き”を催すことになっている。博物館友の会「フォレストクラブ」でも、春の植物観察会のコースに入れることも決定しており、越知町の新名所として、大勢の人々が訪れてきてくれることを願いたい。

(やすい としお/横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員)



写真4

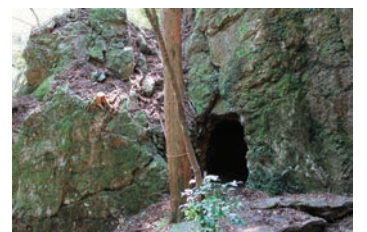


写真3

さようなら、 千石 正一先生

安 井 敏 夫

以前、TBSテレビ番組『わくわく動物ランド』『どうぶつ奇想天外!』などで人気のあった、(財)自然環境研究センターの研究主幹で動物研究家の千石正一先生(千葉県松戸市出身)が、この2月7日に62歳という若さで癌のため亡くなりました。

11年前の平成13(2001)年5月に、横倉山自然の森博物館主催の「講演会」「生き物観察会」に越知町にお招きし、大勢の参加者の下、町内の柴尾地区の水田を子供たちら約120人と一緒に生き



物観察会を行い、出現したヘビ・カエル・イモリ・カメなどについて学習しました。その

際、千石先生は特に爬虫類であるヘビに関心を示し、頭上高く持ち上げたり、参加者の首に巻き付けてあげていたことなどが印象として残っています。この後町民会館の大ホールで、300余名の町内外の聴衆を相手に『日本の爬虫・両生類』というテーマで講演会も開催しました。その中で、「生き物たちとの関係を断ち切っていくと、結局人間自らの首を絞めてしまうことになるから、いろんな生き物と共存できる世界を保持することが結局人間のためである」という考えを持っていたのが印象的でした(『不思議の森から Vol.6』)。

また、千石先生の動物に寄せる思いは強く、野生動物の保護に対する考え方には素晴らしいもの



がありました。すなわち、「飼育より保護を優先させるべき」という立場から、「野生の生き物は基本的に家庭では飼うべきでない」「外来種については、生態系の問題上駆除すべきである」とし、「野生生物を絶滅させることは、飛んでいる飛行機から少しずつ部品を抜き取るようなもので、一つ二つ取る分には問題が生じなくても、ある数以上取ったら必ず問題が起こる」という警告を発していました。しかし、その一方で、急進的な動物保護には否定的で、ある種の過激な反捕鯨活動に対しては批判的であったようです。

現在、地球上のどこかで一日に約100種もの生物が絶滅しているといわれ、例えば象牙を取ることをだけを目的に数少ないアフリカ象の密猟が未だに跡を絶たないという現実を考えた場合、千石先生のようなしっかりとした考えをもった一学者がいなくなったことは、大変残念でなりません。私たち人類が、自分たちの利益やエゴだけのために、この地球上に人類と共存する野生生物をこれ以上絶滅の危機に追いやることのないよう、切に願いたいものです。

千石先生の志を受け継ぐとともに、先生のご冥福を心からお祈りしたいと思います。

「さようなら、
千石先生……」



(やすい としお／横倉山自然の森博物館 副館長兼学芸員)

博物館行事

企画展：『みんなで選ぶ！

おもしろアニマルフォトコンテスト&

写真展 Part II』

2011年9月23日(金・祝)～2012年1月9日(月・祝)



現代社会は“ストレス社会”であると言われて久しく、物質的には豊かでも、精神的には貧しい時代が続いてきた。それと併行して、最近ストレスが原因と思われる犯罪が多発するなど、極めて不安で世知辛い時代となって

きた。このような社会環境の下、いろんな仕事上の悩み、

職場あるいは近隣の対人関係からくるストレス等で、精神的な疲労（心労）に陥る機会が多いのが実状である。そんな時、疲れた心を癒してくれるものの一つが自然や生きものであり、癒しの対象として、また、真に動物を愛し家族の一員とするなど、何らかの理由で動物と接したり、ペットとして動物を飼っている人も数多くいる。その表裏のない純粋な動物の自然で何気ない表情や行動に時には心を打たれ、感動を覚え、また、ユーモアを感じ、何となく心が癒されるのは確かである。

このような動物のもつ底知れない魅力を対象に、身近な動物のユーモアな写真や、珍しい、芸術的な写真を募集し、それらの作品を一堂に展示し、来館者に直接審査してもらうという形式のフォトコンテストを兼ねた写真展を開催する。

これを機に、生きものたちの自然で意外な一面を知ってもらい、多くの生きものにより親しみを感じ、併せて動物愛護の精神をも養って貰えればと願った。

『おもしろアニマルフォトコンテスト Part II』受賞者

【アート賞】

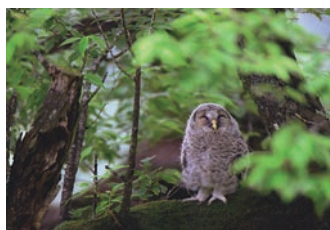
「一番乗り」竹村 悦子



【ナイスショット賞】

「笑う門に福来たる」

北村 健三



《入賞》：10名

「飛び込み姿のネコ」

西森千代子

「どこから来たの～？」

山台 雄三

「レフリーストップ」

國則 美香

「ブルー・ビー 幸せを呼ぶ青いハチ」

伊藤 まみ

「爆睡中」

高梁 彩

「まぶし～」

藤田 柚

「給食の時間だよ～」

竹政 実伽

「鬼ごっこ」 ADRIENNE LISA MIYAMOTO

「チョット待ってて／どや顔」

合田 洋一

「ある日の志」

木村 仁美

【敬称略】

【ユーモア賞】

「買ってケロッ！」

川田真由美

『新屋まりコンサート ～月華～』

2011年10月9日(日) 18：30～

(主催：新屋まりコンサート実行委員会)

『コスモスまつり』に先立って、横倉山自然の森博物館3階展望ロビーで開催。開館以来の外壁の洗浄・塗装がきれいになった空間での演出であった。今回が2回目で、前回と同様、壺にススキを生け、月見だんごを供え、フロアー、スロープ、ステージ周りに竹筒に明かり窓を開けてローソクをととしたほのかな明かりの下で、満月を観ながらの演奏会となった。



企画展：『博物館友の会活動記録&ハンドメイド展』

2012年1月28日(土)～2月19日(日)

横倉山自然の森博物館友の会（フォレストクラブ）の2011年の活動記録を紹介。

「炭焼き体験」でできたいろんな“飾り炭”、視察研修の記録写真、会員の撮った植物写真、絶妙なバランスの下に作られたスティールパンなどを展示し、友の会の活動を知ってもらう機会とする。

また、地元越知町在住の若手作家たちによるハンドメイド作品（子ども服・バッグ・小物など）も同時に展示し発表の場としてももらった。「木炭づくりやってみたいです」「すごく勉強になりました」「スティールパンをやっておもしろかったです」などの感想があった。



友の会だより

『パワースポット』伊勢神宮と平城京 視察研修
2011年10月22日(土)・23日(日) (一泊二日)



初日は、1998年に世界遺産に登録された奈良の「平城宮跡」を見学。建造物としては、2010年に『平城遷都

1300年』を記念して復元された「大極殿」と、従来からの「朱雀門」があるのみである。当時の遺構がほとんど何もないところに、返って想像力とロマンを掻き立てる。次に、現存する世界最古の木造建築である「法隆寺五重塔」を見学。法隆寺は、五重塔・金堂のある西院と夢殿のある東院に分かれ、それらの建築物群が1993年にユネスコの『世界遺産(文化遺産)』に登録された。

二日目は、“パワースポット”として有名な「伊勢神宮」を見学・参拝する。伊勢神宮には外宮と内宮とが離れてあるが、内宮が神宮の中心であるという。内宮の御正殿は「神明造」と呼ばれる日本古来の建築様式を今に伝える唯一の建築物である。

「横倉山クリーンアップ-看板撤去-」

(2011年11月27日(日) 公益社団法人・高知県森と緑の会「緑の募金公募事業」参加者：7名)



横倉山にある「馬鹿試し」を始めとする観光スポットに設置してある古くなった案内板を交換するための撤去作業。片道約45分の遊歩道の距離にある3ヶ所の景勝地に立

つ古くなったアルミ製の案内板〔たて1.0×よこ1.3メートル〕を撤去。

「第2回横倉山クリーンアップ-看板設置-」

(2011年12月17日(土) 公益社団法人・高知県森と緑の会「緑の募金公募事業」参加者：7名)

前回撤去した案内板より小さめの木製(防腐加工)のものを設置。現在推進中の『仁淀川・四国カルスト ジオパーク』認証に向けて、日本語と英語による解説文を付ける。



「炭焼き体験」

(2011年12月18日(日)・2012年1月14日(土)・3月31日(土)・4月7日(土))

毎回果物・野菜などいろんな題材を窯に入れて焼き、“飾り炭”や展示用として使用。出来上がりが楽しみです。

で、人気が高く毎回参加者が多い。4月7日にはみんなでお花見昼食会も行った。



「スターウォッチング

～冬の星空観察会・スバル～」

(冬期 全国星空継続観察事業)

(2012年1月22日(日) 指導者：片岡重敦(元横倉自然の森博物館館長) 参加者：14名(内事務局2名))

天の川付近のペルセウス座・ふたご座、“すばる”(プレアデス星団)を観察し、大気の汚染度をチェックする。

「エボシ岩への道づくり」

(2012年3月24日(土) 参加者：3名(内事務局2名))

ここ数年行ってなかったアケボノツツジの小群生地・エボシ岩への道の草刈と古くなった案内板の付け替えを行う。小雨混じりの強風の吹くあいにくの天候だった。



横倉山ミニ歳時記

■キウイの原種-サルナシ-

漢名：猿梨、マタタビ科。

果実は球形に近く、短径(横)2センチ、長径(縦)2～2.5センチ。

“ナシ”という名が付いているが、味はキウイに極めて近い。というのも、キウイフルーツの原種は、中国南部に見られるサルナシの近縁種であるシナサルナシであるためである。

博物館の水庭(池)の水際にある桜の木に鈴なりになっていて、スロープから手の届く所までツルが伸びてきていて来館者から珍しがられている。今年になって気付いたことであるが、これをエサにする小動物がいるらしく、2月10日頃からスロープに糞が落ちているのが目立つようになった。糞の形状は、3×5センチくらいの団子状で、“落とし主”は、木登りが得意で果実が好物のハクビシンかこれを好んで食べるニホンザルが考えられる。

サルナシは別名「シラクチカズラ」と呼ばれ、ツルは直径5センチ、長さ50センチにも達することがある。しかも大変丈夫で腐りにくいことから吊り橋で有名な「祖谷のかずら橋」(徳島県)の材料に使用されている。

横倉山のアカガシ原生林内には、これに似た直径10センチにも達するツルアジサイの巨大カズラがある。

[写真撮影：2011年12月10日]

〔博物館日誌(抄)・平成24年度博物館行事予定〕

- 2011年9月23日(金・祝)～2012年1月9日(月・祝)
企画展：『みんなで選ぶ! おもしろ アニマル
フォトコンテスト&写真展Part II』
- 1月28日(土)～2月19日(日)
企画展：『博物館友の会活動記録&ハンドメイド展』
- 3月3日(土)～4月8日(日)
春季企画展：『「まんが甲子園」作品展』
- 4月28日(土)～6月17日(日)
企画展：『ゆかいなパロディー木彫展』
- 6月26日(火)～7月1日(日)
第34回写真家協会展：『土佐』選抜移動展
- 7月14日(土)～9月9日(日)
夏休み企画展：『デハラユキノリ粘土展』
- 7月～8月
夏休み博物館教室〔昆虫・植物・化石・工作〕
- 9月25日(火)～11月23日(金・祝)
開館15周年記念企画展：
『野並允温 絵画展—故郷への郷愁—』(仮称)

〔博物館友の会「フォレストクラブ」の平成24年度活動予定〕

- 2011年10月22日(土)・23日(日)〔一泊二日〕
“パワースポット”伊勢神宮と平城京
視察研修

- 10月30日(日)
“土佐の投げ入れ堂”聖神社(小日浦)
の参道整備〔雨天のため中止〕
- 11月27日(日)
「横倉山クリーンアップ—看板撤去—」
(緑の募金公募事業)
- 12月17日(土)
「第2回横倉山クリーンアップ—看板設置—」
(緑の募金公募事業)
- 炭焼き体験
初日の出を横倉山で
炭焼き体験
スターウォッチング
～冬の天の川★すばる～
- 炭焼き体験
炭焼き体験
黒森山の植樹会
エボシ岩への道づくり
炭焼き体験
春の植物観察会：「土佐の投入堂」
聖神社、アケボノツツジ観察会」
友の会総会
ヒメボタル観察会(横倉山杉原神社)
スターウォッチング
～夏の天の川★こと座～

スタッフの声、声、声

〔山中〕 横倉山は、4億年以上前の地層から成り化石の宝庫であること、植物の種類が多く、牧野富太郎博士の研究の山として有名であること、また、安徳天皇潜幸伝説、陵墓参考地をはじめとする平家落人の史跡があり、山全体が神秘とロマンに満ちた、大変魅力的な山です。

越知町は、この素晴らしい町の財産である横倉山の化石や植物を保護するために、横倉山の南斜面の山林を約4.7ha(カブト嶽付近～市山の上の間、鬼石垣の付近)を購入しました。

町の貴重な財産である化石等が盗まれないように、守りたいと思いますので、町民の皆さんのご協力をお願いします。

横倉山自然の森博物館は、本年開館15周年を迎えます。企画展の充実や児童生徒の学習の場を増やし、ふるさとの越知町には、こんな素晴らしい博物館があると子どもたちが誇れるような博物館にしたいと思っています。

〔安井〕 今年は例年になく冬の寒さが厳しかった所為か、植物の開花が二週間近くも遅れ、3月3日の「お雛様」に飾

る桃の花もその時期はまだ固い蕾の状態であった。我が家の桃も3月14日頃やっと蕾が膨らみ始めた。南国高知の桜も21日に全国のトップを切って開花し、その後満開近くになって人々の目を楽しませてくれたかと思うと、4月3日の季節はずれの台風並みに発達した温帯気圧の通過で、花が少なからず散ってしまったものもあったようである。そればかりか、突風で全国で多数の死傷者が出るという痛ましい結果にもなってしまった。自然とはかくも過酷なものなのか……。自然の「優しさ」と「厳しさ」という両極端な“二面性”をいつも感じさせられる。

〔前田〕 桜の花も残念ながらわが越知町では終わってしまいました。もうすぐ新緑の眩しい清々しい季節が訪れます。横倉山のアカガシの梢から木漏れ日が差し、そして鳥の囀りとヒンヤリした空気が心を落ち着けてくれます。この時期の横倉山が一番好きです。またヒメボタルの乱舞も楽しみです。

4月から横倉山自然の森博物館副館長をさせていただきます前田桂藏と申します。

よろしくお願いします。

〔壬生〕 野老山で餅まきがあり、国際交流員と外国語指導員も一緒に参加しました。彼らは初めての餅拾いでありビニール袋片手に戸惑っているようでした。しかしいざ始めてみると楽しそうに餅をキャッチしており、日本文化に触れることができたのではなかったでしょうか。帰りの車中でも「とてもエキサイトね、興奮しました。」と話してくれました。餅まきを楽しめるのは万国共通のようです。お茶粥もご馳走様でした。

〔小野〕 数年ぶりにお花見をしました。眼下には穏やかな流れの仁淀川も望める場所です。残念ながら台風並の雨と風でしたが、午後には雨も止みボタンザクラを始め数種類の桜とモモやトサミズキなど様々な花を楽しむことができました。

〔伊藤〕 開花が遅れていた桜もあったという間に散り、聞こえる蛙の鳴き声も種類が増えました。庭のさくらんぼも徐々に膨らんで今年もたくさん収穫出来そうです。子犬や春雛の地鶏が新しくやってきて今年の春も賑やかになりました。

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館



THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知 — JR特急 約30分 — 佐川 — バス 約15分 — 越知
JR普通 約50分

